とりごえ たかし
鳥越隆士
障害科学コース
教授

●「理論と実践の融合」に関する共同研究活動とは
／兵庫教育大学のミッションの一つである「教育実践学の推進」をより一層図り、その成果を国内外に発信し、学校現場や教育委員会のニーズに応えるため、平成23(2011)年から「理論と実践の融合」に関する学際的な共同研究を教員から公募し展開しています。

研究レポート

聴覚障害児のインクルーシブ教育:合理的配慮としての手話活用の実践的検討

（平成27～28年度「理論と実践の融合」に関する共同研究活動に採択）

手話（ここでは日本手話）は、日本語とは異なる独自の構造を持つ言語で、ろう者の社会で用いられてきました。聴覚障害児教育では、長い間手話を用いない教育（聴覚口話法）が行われてきましたが、近年、聴覚障害児にとって、音声言語だけでなく手話を学び、いわばバイリンガルになることの意義が大きいと考えられるようになってきています。聴覚特別支援学校（ろう学校）で手話を活用した取り組みが広がっていますが、通常の学校での手話による実践は非常に乏しく、また系統的、組織的な研究も行われていません。本研究では、難聴学級を持つ通常の小学校で手話活用の可能性を検討しました。

ろう者の手話教員が声を使わず、手話による対話を通して手話の指導を進めています。

実施した取り組みは、①聴覚障害児への手話指導、②通常の学級の授業での手話通訳による支援、③健聴児に対する手話指導、④教員研修を含め、学校全体としての手話への取り組みです。調査対象は難聴学級を持つ小学校2校で、難聴学級在籍児童はそれぞれ10人から15人程度です。今回は、主に①について報告します。手話の指導は1カ月に2回程度。手話の先生は、成人のろう者です。音声を用いず手話のみを使います。手話学習の1年間を追ってみました。次の四つにまとめることができました。

●声から手への変化

当初、音声だけで先生に呼び掛けたりしましたが、徐々に手話と声を併用して、さらに手話のみで話し掛けるようになりました。併用のやり方は、まず発言の一部のみが手話で表現されましたが、徐々に手話と声が対等になり、さらに手話の方が中心になっていきました。

●耳から目への変化

当初、教員の手話を見なかったり、自分の手話表現を相手の視覚的注意の獲得なしに表現したりすることがありましたが、手を振る、軽く相手をたたくなどにより相手の注意を獲得したり、発言中に相手が見ているかどうかを確認したりしながら発言するようになりました。

●多様で柔軟な関わり

当初は手話表現が十分でなく、声のみで話し掛け、伝わらないことが多く見られましたが、身振り、文字、指文字、口型など、手話だけでなく、さまざまな方法を柔軟に使ってコミュニケーションを行うようになっていきました。

●対話集団の形成と談話の拡張

当初は教員が尋ね、児童が答えるという1対1のやり取りで学習が進んでいきましたが、まず児童同士の手話による対話が生まれ、さらに教員も含めた児童間の手話による対話空間が形成されました。また、教員から児童への一方的な関係だけでなく、児童から教員へと、あるいは児童同士のさまざまな話題の展開（情報の追加、質問、関連した経験を話すなど）が見られるようになっていきました。

このプロジェクトは、今年度で8年目を迎え、現在も継続中です。手話を学んだ聴覚障害児たちがどのように成長していくのか、研究は新たな段階に入りつつあります。

RESEARCH STUDY REPORT